

守るべき存在（在来種）から駆除すべき存在（外来種？）へ  
～クサガメをどう扱うか、現場の苦悩と対応～

和亀保護の会 西堀智子・久米卓美

和亀保護の会では2004年より大阪府茨木市・摂津市を流れる大正川でニホンイシガメを保全する活動を行っている。活動の一つは外来種の駆除であるが、活動を開始した2004年、大正川のカメ類で外来種であったのはミシシッピアカミミガメと、遺棄されたペットのリバーカーラー、ハナガメ、ミシシッピニオイガメなどであった。ところが2011年、鈴木大氏によるDNA研究により、クサガメ外来種説が論文化されると、各地からニホンイシガメとの雑種問題が報告され、また繁殖干渉の問題なども指摘されるようになった。クサガメは守るべき存在から、駆除すべき外来種へと変容していったのである。

とは言え、それまで特に関西ではクサガメは在来種として大事にされていた生き物であり、大正川でも個体識別して生息状況を調べてきたカメであった。「実は外来種だった」「ニホンイシガメ減少の原因の一つだった」と言われても、既に愛すべき生き物になっており、駆除は受け入れがたいものだった。だからこそ魚類関係者からの「関西のクサガメについて、外来種と判断するのは慎重になるべき」という指摘は甘い誘惑のようでもあった。

もちろん魚類関係者からの指摘に、カメ研究者はさらに研究することで真摯に答えなければならないのは当然のことである。しかし一方で我々も大正川のクサガメについての現実から逃げるわけにはいかなかった。もし関西のクサガメが在来種であったとしても、都市河川である大正川のクサガメの全てがそうであるわけではない。明らかに捨てられて定着・繁殖した中国大陸由來のクサガメと思われる小型の個体も多数見つかっており、大正川のクサガメとの雑種も生まれているのは想像に難くなかった。ニホンイシガメのために何らかの対策をせねばならないことは自明であった。

苦肉の策として大正川のニホンイシガメが主に生息する上流からクサガメを排除すべく、捕獲したクサガメは、全て下流に移動させることにした。カメは場所に保守的な生き物であるので、移動させた何割かは元の場所に戻って来るであろうことは想像できたが、特に越冬前後に交尾するクサガメの冬場の下流への移動は、ニホンイシガメに対する影響をある程度軽減すると考えたのである。

移動は2020年の冬から始めたが、はじめは影響が大きいオスのみだったので、全てのクサガメの移動を行うようになった2022年から2025年のデータを整理し、移動がどの程度有効であるのかを調べた。そしてほとんど効果がないことを確認した。ならばこのまま何もしないわけにはいかない。しかし長い付き合いの大正川のクサガメたちを手にかけることはあまりにもつらいと悩んだ。悩んだ末に近年ニホンイシガメたちのために進めたささやかな取り組みを紹介する。

写真：朝日新聞社の小坪遊記者に、大正川のクサガメ問題に悩む姿を取材していただいた。（p75～85）

